

「海中浮遊系生物」撮影テクニック

水中を漂って生活するクラゲや小型の甲殻類、魚類の仔魚。

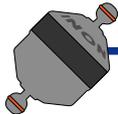
これらの浮遊生物を美しく、透明な体の輪郭が浮かび上がるように撮影する、
とっておきのテクニックをプロの写真家に紹介させていただこう。

解説&写真 峯水 亮

静岡県大瀬崎の現地ダイビングインストラクターを経て、1997年にフォトグラファーとして独立。2000年には、生態写真だけを用いた日本の海の甲殻類図鑑「海の甲殻類」、2013年には「サンゴ礁のエビハンドブック」を文一総合出版より刊行。現在は、特にクラゲやプランクトンなどの浮遊生物の撮影を、国内・アメリカ・東南アジアで継続中。 <http://www.seacam.jp>



左) エフィラクラゲの上にあるゼリーフィッシュライダー。ヒメセミエビ科のフィロゾーマと思われる
右) 端脚類プランクトンのツノウミノミ

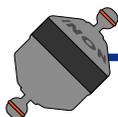


浮遊生物とは

浮遊生物とはいわゆるプランクトンを意味します。彼らに自ら泳ぐ遊泳力はほとんどなく、潮に流されたり、潮を利用して漂っている生き物たちです。普段のダイビングでは出会うことのないような生き物が大半で、クラゲや無脊椎動物の幼体、深海から浅海に生息する魚やイカの仔魚が主になります。体が透明なものや、

大人のそれとは想像しにくいほど奇抜な姿形をしたものなどがいて、そんな生き物たちの知られざる姿を観察したり、撮影したりするのが、浮遊系ダイブの大きな魅力です。彼らがいるのは、日中の水面直下から水深10m前後。種類によっては、集光性（光に集まる習性）を利用して、夜間のライトトラップ下でも観察できま

す。大きさは数mmから数十cmと様々。ほとんどの場合、着底せずに中性浮力を保ちながら中層で撮影することになるため、一般的な水中撮影とは異なる撮影機材やテクニックが必要となります。



浮遊生物のための撮影機材

浮遊生物の撮影においてまず重要なのは、水中でのハウジングのバランスです。ふわふわと浮遊する生き物を撮影するには、一定水深に留まることができる中性浮力のダイビングスキルが必須ですが、更に、カメラハウジングを適正な浮力（重すぎず軽すぎず）に調節することも重要です。ハウジングのグリップを片手で握っていても、腕が疲れない程度の中水重量が理想的です。私が使用している INON X-2 for EOS60D ハウジングの場合、ストロボを取り付けるアームには、INON のスティックアームフロート S を取り付けしたマルチボールアームを使用し、さらにハウジングにメガフロートアームを取り付けて、ハウジング全体の水中重量

INON X-2 for EOS60Dハウジングに、スマートを装着したS-2000ストロボをセット。浮力を調節するために、スティックアームフロートSとメガフロートアームを使用している



を軽減しています。また、フロートを取り付けた際のバランスは前後に偏っても使いづらいため、ハウジングが自然な水平に保たれるよう、フロートの位置など全体の構成を仕上げるのが理想的です。

次に重要なのは、レンズの選択です。浮遊生物の撮影における表現手法は、一般的な生物撮影と同じようにワイドもマクロもバリエーションがあります。最短撮影距離の短いワイド系レンズで背景を入れながら寄って撮影するワイドマクロ的な撮影方法もいいですし、マクロ

レンズで小さな世界を切り取るのもいいでしょう。現在、私が浮遊生物の撮影においてよく使っているレンズは、Canon EF50mm F2.5 コンパクトマクロとEF8-15mm F4L フィッシュアイ USM です。EF50mm F2.5 コンパクトマクロは、APS-C サイズのEOS 60D で使用すると、35mm換算で焦点距離は約75mm、撮影倍率は0.75倍となります。最短撮影距離は23cmと、浮遊生物撮影にはちょうど良い撮影距離で、使いやすいレンズです。



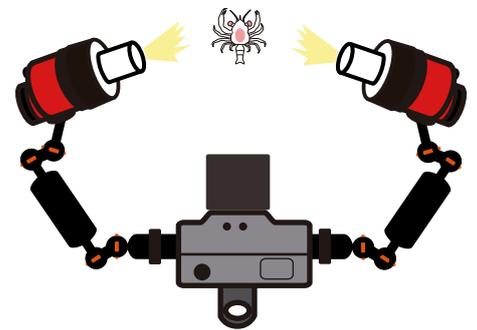
Canon EF50mm F2.5 コンパクトマクロレンズ



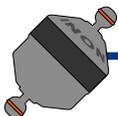
ゴミを写さないライティング

そして最後に重要となってくるのはストロボライティングです。もし背景を黒くして被写体を際立たせるような撮影表現をするのであれば、シャッタースピードを速くして背景を暗くし、被写界深度を稼ぐためにレンズの絞りを絞り込むこととなります。背景を暗くして透明な生き物を撮影すると、当然気になってくるのが肉眼では見えていない周りの微細な浮遊物です。一般的な水中撮影では、カメラの横にストロボを配置しますが、ストロボと被写体の間や背景にある浮遊物がストロボ光を反射し、画面の黒い部

分に白い点となって浮き立ってしまうことがあります。ひどいときには見事に作品の邪魔になります。そういう場合に有効なのが、顕微鏡での撮影などに使われる暗視野撮影（厳密には落射暗視野撮影に近い）という方法です。INONのストロボにスヌートを取り付けて照射角度を狭くし、アームをハウジングの前に伸ばして、被写体の真横よりやや手前から角度を付けて照射します。そうすることで、手前や奥の浮遊物の写り込みを低減することができます。

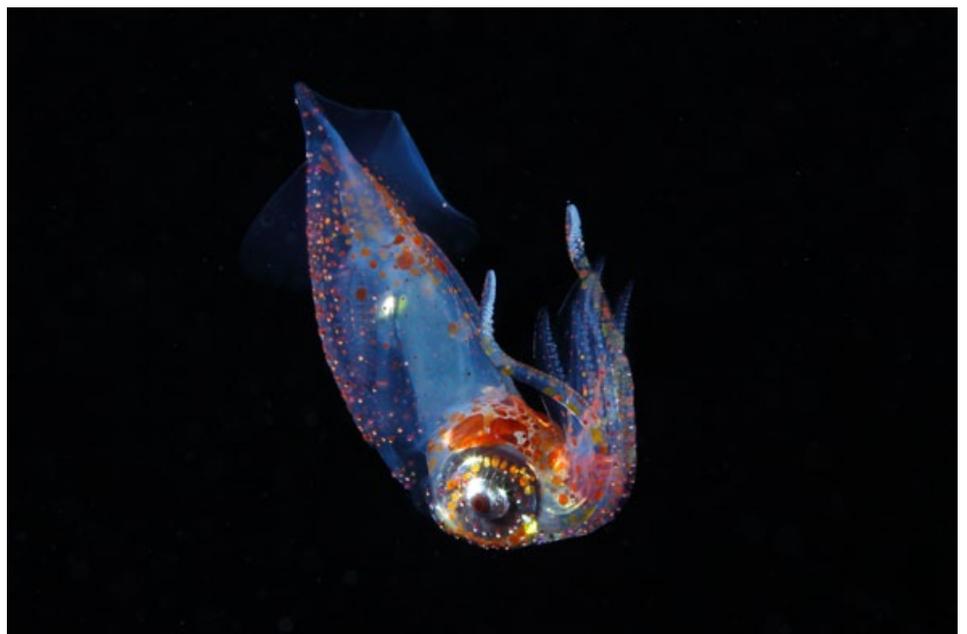


スヌートで照射角を絞ったストロボ光を、被写体の真横よりやや手前から照射する



ピント合わせ

もちろん、ストロボの照射角度が狭くなることによって、動いている被写体にストロボ光を当てるのは至難の業になることは言うまでもありません。そこで、マニュアルフォーカスでピントの合う距離を固定（いわゆる置きピン）して撮影します。指をレンズの前においてピントを合わせて試写し、ストロボ光が指に適切に当たっていることを確認してライティングを決めた状態にしておきます。あとはフォーカスを触らず、ファインダーの中に被写体が入ったら体を前後にしてピントを合わせ、ピントが合ったところでシャッターを切るという方法で撮影します。この置きピン方法は、等倍のマクロレンズに比べて被写界深度の深いCanon EF50mm F2.5 コンパクトマクロとEOS 60Dの組み合わせならではの撮影手法と言えるでしょう。



ホタルイカモドキ科の一種